



教育新報

第182号

新潟大学

これからの教育を担う人材の育成



教育学部同窓会副会長
齊藤 裕子

私は、小学生の頃から、将来は学校の先生になりたいとずっと思っていました。その気持ちは変わらず、大学を選ぶときも、迷わずに新潟大学教育学部を選びました。大学に入学し、教育実習を経験してから、学校の先生になりたい気持ちにはより一層強くなりました。教育実習での子供たちとの出会い、指導してくださった先生のすばらしい授業や学級経営に大きな感銘を受けたことが理由です。学校には大きな変化が起こっています。その中で最も心配していることは、教員を目指す人が減っていることです。教員採用試験の倍率が下がっています。また、講師が不足し、全くないという状況が続いています。教員の仕事は大変だ、勤務時間も長いと言われることがあります。マスコミの過激な報道も大きく影響しているように思います。私は、教員を目指す人が減っている状況に心を痛めています。教師の仕事は大変かもしれないけれど、やりがいや喜びがたくさんあります。新潟県や新潟市では大量退職を迎えます。これから教員

になる人にバトンをつけないでいくことが課題となっています。しかし、そんな私の心配はなくなりました。それは、勤務校で受け入れた教育実習生の姿を見たからです。今年度、勤務校では、5人の新潟大学教育学部の学生を受け入れました。どの学生も目がキラキラと光り、子供たちと生き生きと関わり、休み時間に汗を流して一緒に遊ぶ姿が見られました。授業研究にも全力で取り組んでいました。子供と関わることを喜び、授業のために一生懸命努力する教育実習生を見て、これからの教育を託せると確信しました。教育に対する夢・希望・情熱をもった学生がたくさん育っていることを心強く思いました。新潟大学教育学部で学ぶ方々の進路は、いろいろあると思います。教育学部で学んだ教育の意義や価値をこれからの人生に生かし、教育を支えていってほしいと願っています。

花鳥風月

「ここは、五十年後の〇〇小学校です。」

「今では、一人に一台ずつ、持ち運びができるミニパソコンで勉強しているんだ。」

「教科書やノートも使わないから、ランドセルもいらないんだ。」

「フロップピー一枚だけ持っていれば、どんな勉強だってできてしまうんだ。」

二十年程前、当時勤務していた小学校の周年事業で、児童が発表した内容の一部である。

当時予見した未来は夢物語ではなかった。GIGAスクール構想により、予想を遙かに上回る速さで学校のICT環境整備が進んでいる。ミニパソコンはタブレットに、フロップピーディスクはクラウドにと、技術の進歩も目覚ましい。

VUCAな世界と言われるように、社会はますます予測困難な時代である。その中で、ICTは学校教育を支える基盤的なツールとなる。これまでの実践とICTとを最適に組み合わせ、Society 5.0時代にふさわしい学校の実現に向けて取り組んでいきたい。

(広報部 若月 利春)

情報交換

情報発信

新潟大学
教育学部同窓会
ホームページ



大学の
コーナー

英語科近況報告

教育学部 教授

本間伸輔

同窓生の皆様、こんにちは。この「教育新報」の冊子を手に行っているみなさんの中には、大学を卒業してしばらく経ち、かつての学舎で今何が行われているか、気になる人もいます。

特に近年では、大学の改革が絶えず求められる状況にあり、新潟大学も教育学部も年々何かしらの変革が行われてきました。この変革は当然のことながら学科単位にも及び、各学科においても様々な変化が生じたり、様々な取り組みが行われたりしています。そこで、本稿では、私の担当する英語科（教育学部英語教育専修）の近年の動きの一部をご報告しようと思います。

英語科内でも、近年大きな変革や行事を経験しました。英語科は、中学校主免のみという時代が長く続いた後、平成二十年度より小学校主免が設置されました。平成三十年度からは、教職再課程認定に対応した新カリキュラムが開始され、「英語科教育法（初等）」と「小学校英語」が学部全体の小学校主免学生の履修科目に新たに加わり、令和四年度からは初等教育実習の事前・事後指導でも「英語」のコースが設けられます。これでカリキュラム上でようやく他の専修と肩を並べることとなります。この間、平成三十年度に

は小学校英語教育を専門とする教員を、令和二年度には英文学と英語学それぞれの教員1名ずつを英語科にお迎えすることができました。

この間に、英語科教員が力を合わせて成し遂げた大きな出来事が二つあります。一つは、英語科の新カリキュラムの策定および教職再課程認定への対応でした。英語科のカリキュラムの場合は、「外国語（英語）コアカリキュラム」（文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力教科のための調査研究事業」平成二十八年度報告書）に沿うものであることが求められました。「外国語（英語）コアカリキュラム」では、英語科の教育内容に含めるべき事項が細かく指定されますので、各専門科目のシラバスをそれに沿うように設計しなければなりません。加えて、教職再課程認定では、各科目の担当教員が、その科目の教育内容に沿った研究業績を有することが求められます。英語科の場合は特にこれが求められたようので、英語科教員全員が参加する共同研究プロジェクトを順次立ち上げ、共著の論文として執筆・発表していきましました。上述の小学校関係の新科目に関連した研究も、プロジェクトの成果として2編の共著論文を発表して

います。文系の研究者は、理系に比べると一般に共同研究の機会が少ないという傾向があり、英語科も例外ではないのですが、その意味で、この一連の研究は貴重な機会になったと言えます。二つ目は、「小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開催・実践事業」（文部科学省委託事業）として、小学校教員向けの新潟大学免許法認定講習を平成二十八〜三十年度に行なったことです。これは、現職の小学校教員が、教科化される英語の授業を担当するために、中学校教諭二種免許状（外国語（英語））を取得し、英語の専門性を身につけることを目的としたものでした。県内の中学校英語関係の指導主事ならびに他大学の小学校英語研究者を検討委員として迎え、英語科の全教員および「生徒指導・教育相談・進路指導Ⅰ」担当の教育心理学専修の3名の先生方が講習を担当するという形式で行いました。講習の内容は、教育学部で開講されている「英語科教育法Ⅰ」や「英語教育と英文法Ⅰ」などの科目を、小学校英語教育向けに多少のアレンジを加えるというものでした。新潟大学や附属長岡小学校を会場として、土曜日に4〜5コマを開講するという、担当者にとっても受講者に

とつても決して楽ではないスケジュールでしたが、受講者の皆様が大変熱心に受講しておられたという印象がかなり強く残っています。私の方も、その熱心さに応えるべく、準備に大変熱が入ったことを覚えています。年度最終科目の最終日に受講者の方々が打ち上げ会を企画してくださった際は、疲れが癒されるひと時を過ごさせていただきました。

最後に、私自身の大きな出来事と言いますと、前述の新カリキュラムにおいて、4つの科目を新たに担当することになったことが挙げられます。そのうちの「英語学概説」は、英語学全般について学習する科目ですが、英語学という分野は大変多岐に渡っており、英語の歴史や音声、言語習得、世界における英語などといった、非常に幅広い範囲の事柄を扱います。これに加え、「英語教育と音声学Ⅰ」「同Ⅱ」という、英語の音声の仕組みについて学習する科目も新たに担当しています。私自身の研究分野は文構造と意味、つまり文法ですので、これらの科目の大半は、自分の研究分野から遠い内容を扱わなくてはなりません。学生時代に勉強した内容を復習したり、テキストや関連資料を丁寧に調べたりしながらです。準備に非常に時間がかかってしましますが、自分の研究の幅を広げる機会とも捉え、授業の準備に没頭していきます。帰宅が夜十時を過ぎてしまうこともしばしばですが。



令和三年度新潟大学・全学同窓会交流会講演会が、人文・法・経済学部同窓会の企画・運営のもと、十月十七日(日)に開催された。新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から、昨年度は中止であったが、今年度はオンラインでの開催となった。

特別企画では、越後警女唄演唱者・ごぜ唄集団「さずきもん」主宰の萱森直子氏より、「越後の暮らしを支えた娯楽・警女唄」と題し、三味線を奏で語り物を唄いながら、各地を門付けして歩く「盲目の女旅芸人」警女について講演していただいた。

近世まではほぼ全国各地で活躍していた警女が、その後は活躍の場も狭まり、昭和の半ばくらいまでは活躍の中心地が新潟県(越後)になっていったこと。また、萱森氏の師匠である小林ハル氏の前半生を描き、芸の成り立ちをたどり、生きる喜びをコンセプトとした映画「警女GOZÉ」が令和二年夏に公開され、大きな反響が今なお続いていることなどが紹介された。そして、映画の挿入歌を含め数曲を実演していただいた。

続いて、前新潟大学人文社会科学系教授の原田建一氏から、「デジタル画像アーカイブが明らかにする新潟」と題して、記念講演をしていただいた。「アーカイブ」とは、記録を保存、活用し、未来に伝達する組織や機関を意味する。近年、それぞれの地域の日常生活の中に映像というものが普及し、浸透する過程で、人々が様々な形で自分たちの姿や地域社会の儀礼や催し、仲間との宴を写真や映画、ビデオなどで撮影してきた。それらの映像は地域社会を見直したり、地域の文化を発見したりする資料として収集し、デジタルで保管してきた。講演の中では、新しい社会の文化遺産として蘇った写真や画像を紹介しながら、地域デジタル映像アーカイブというものが、新潟という文化の奥底に眠っていた記憶を掘り起こすものであるということを確認し、語っていったものであった。

講演会等、オンライン開催が主流となつてしまった昨今、来年はぜひとも対面で開催できることを願っている。

会員の広場

思い出、今、これから

「報・連・相」



新潟市立釜木小学校
山上 拓郎

大学時代の思い出といえば、教育学部の友人たちと講義の空き時間にしたフットサルである。サッカー経験者ではなかったが、フットサルの楽しさを知ったり、他学科の友人たちと繋がったりすることができた。熱中しすぎて、次の講義が始まる時間だというのに続行したこともあった。そのせいで落としてしまった単位もいくつか・・・。

卒業して八年が経ち、三十歳を迎えた。今でもたまに週末はフットサルを楽しんでいる。そこには大学の友人もいるが、社会人で初めて出会った方もいる。年齢や職種等の違いがあり、自分の知らない世界の話を聞くのも楽しみの一つだ。ただ、翌日の筋肉痛だけはどうにもならないのが現状だ。

これから先、自分はスポーツを通じてどんな人と出会うだろうか。自分の娘はどんなスポーツを好きになるのだろうか。そのとき、自分と一緒にできるぐらい体力はあるのだろうか。期待と不安で胸がいっぱいだ。



新潟市立根岸小学校
山本 桜平

新潟大学在学中に教授に「報告・連絡・相談」について何度も指導を受けた。当時はその指導の意味を完璧には理解することはできていなかった。

教員になり一年目、保護者対応の報告を怠り、事を大きくした。「もう少し早く対処していればよかったね」と管理職から指導を受けた。

教員三年目の年では、初めての分掌が多く「前の年のものを使う」と考えた。そんな時、当時の教務主任から「もつと山本先生の色を出したほうがいいよ」とアドバイスをいただいたり、相談にのっていただいたりして、自分のやりたいことが見つかった。

五年目を迎えた今では、当時の教授の指導がいかに自分にとって必要であったかが分かる。「報・連・相」を行うことは、組織として必要なだけでなく、自分にとって学びを得ることができたり、気分転換ができたりすることができる。これからも「報・連・相」を心掛けていく。

会員の広場

インフルエンサー



三条市立井栗小学校

青柳 道代

我が家には、インフルエンサーが二人いる。と言っても、家族に対してだけではあるが。

一人目は、上の娘。韓国アイドルを好きになり、良さを私や妹に熱く語った。その結果、妹は韓国語を学ぶ道を選び、私も通勤時によく分からない韓国語の歌を聴いている。

二人目は、下の娘。劇団員育成ゲームやTVアニメなどにはまり、私に教えてきた。その結果、この夏、私はコミックの大人買いをする羽目になった。もちろんグッズ集めにも協力している。なかなかお金がかかるインフルエンサーたちである。しかし、その繋がりがあるおかげで、県外に出ている娘とも頻繁に連絡を取り合うことができている。一緒に暮らしていない寂しさも半減である。そして何より、自分が若くいられる気がしている。

我が家のインフルエンサーたちが、今度はどんなことに興味を持つのか、今から楽しみにしている。

自分づくりの日々



上越市立浦川原中学校

小柴 崇

「目的」をはっきりさせた後、「内容」「方法」を考える。私が大切にしていく思考法である。「何のためにやるのか」「なぜ、やるのか」があれば、「何をすればよいかや、しなければならぬか」「どのようにすればよいかや、どちらのやり方がよいか」が見えてくる。内容や方法に悩むときは、必ず目的に立ち返る。

また、「なぜ」も大切にしている。この言葉で繰り返し自分に問うことで、より深く考えることができるからだ。何かをやればよいわけではないし、過去にやっていたことにこだわらなければならない。本当に大切なのは、「目的」を達成することなのだから。

この思考法を身に付け、ほとんどの物事を円滑に進めることができるようになった。しかし、管理職になり、新たな課題も。人を動かすこと、人を変えることの難しさを痛感する日々である。課題に真摯に向き合い自分づくりを続けていきたい。

学級担任



燕市立燕南小学校

長谷川 和輝

「おはようございます。」と毎日言う。今となっては当たり前だが、大学生の頃、きちんと挨拶していたかは定かではない。

新潟大学を卒業し、二年目の教員として働いている。学生と教員、どちらも学びの場にいることには変わりはないが、その立場の大きな違いを感じている。

小学生の頃、作文が苦手だった私が括弧で書き出したことで、「面白いね」と褒められた。その一言で終わったため、おそらく他に褒めることはなかったと思う。だが、今でも思い出せるくらい私にとっては大きい一言だった。

担任にとつて子どもは、数十人いるうちの一人。しかし、子どもにとつてみれば担任は一人しかいない。一年間で一番見てあげられるのは私だ。私を見て、作文を褒めてくれた当時の先生のように、一人一人に目を向け、良いところや頑張っていることをたくさん認め、褒められる教員になりたい。

得意を伸ばすこと



湯沢町立湯沢中学校

根津 元

今年度は勤務校でもタブレットが配備された。担当する理科では、実験の動画を撮影させたり、ワークシートをデジタルで配布しキーボード入力させたり、アンケート機能を活用して用語テストを行ったりと活用している。また、タブレットを活用した授業を公開し、他の先生方にもどんなことができるかを積極的に紹介した。学生時代よりデジタル機器を使い、動画編集やブログラミング等を行っていたため、今の環境は自分の得意なことを活かしていると感じている。一方で、不得意なことは他の先生方に多くのフォローをしていただいて、充実した教員生活を過ごすことができている。

私がそうであるように、子どもたちにとつても学校が得意なことを活かせる場所になるよう支援していきたい。勉強、部活、運動、合唱、生徒会活動等、活躍の幅は限られている。子どもたちのそれぞれの良さを発揮できる環境づくりを頑張っていきたい。

学校紹介 ①

地域とともにある学校
豊かな自然と協力的な地域

聖籠町立亀代小学校

当校は、聖籠町の北西部に位置し、日本海に面した砂丘地帯の次第浜（汐美台）・亀塚・網代浜の三集落から学区が形成されています。

今年度、全校児童は三百三十名、十六学級（特別支援学級四学級を含む）となっています。また、町の施策もあり、新興住宅地を抱え、わずかずつではありますが児童数が増加している学校です。

児童の多くが純朴・素直で活発で、スポーツや行事など様々な活動に挑戦し、成果を上げてきています。

また、保護者や地域の方は、学校の教育活動に協力的であり、地域学校協働本部の働きかけもあって、ボランティアとして学校の教育活動に積極的にかかわってくださっています。

一 地域とともにある学校

亀代小学校（聖籠町）は、平成二十年度から、学校運営協議会制度を取り入れています。校長の学校運営の基本方針について承認をいただいたり、学校評価等を基に、学校運営や教育活動に対して、意見をいただいたりしています。学校運営協議会からの意見に基づいた、児童・保護者を対象とした



(文責) 校長 近藤 幸栄

「ゲーム・ネットトラブル防止講演会」は、今年で三年目となります。また、この学校運営協議会制度とともに、地域学校協働活動（令和二年度より。それ以前は、学校支援地域本部事業として活動）が盛んで、地域とともに様々な活動をしたり、支援をいただいたりしています。
毎年六月には、地域の海岸で、児童・地域住民、地域企業体の方々や協働して「クリーン作戦」（海岸清掃）を実施しています。また、二年前からは、総合的な学習のメインテーマを「海」に設定し、学年ごとに「海の安全」や「海の環境」、「亀代の魅力発信プロジェクト」など様々なテーマで学習を進めています。
令和三年度には、これらの教育活動が総合的に評価され、新潟県環境賞（環境教育・学習部門）を受賞しました。

二 タブレット端末を活用した学習の推進

当校では、令和二年九月から、本格的にタブレット端末を学習に取り入れ活用してきています。今では、すべての学級でほぼ毎時間、当たり前のようにタブレット端末を活用し、学習が進められています。

児童は、学習課題に対して、学習アプリ「ロイロノート・スクール」を使い、自分の考えを書き込み教師に提出したり、共有機能を使って、友達と考えと比較検討したりしています。また、学習課題に対して、必要に応じてネット検索して調べたりしながら、学習を深めています。

また、令和三年度から、「AIDリル・キュビナ」（五教科）を全児童のタブレット端末に入れ、児童一人ひとりの進捗状況や理解の度合いを、それぞれ担任のタブレットで一元管理し、基礎学力の向上に資するように努めています。



令和三年度 会務報告

令和三年

入学式・保護者懇談会

(オンライン)(中止)

令和二年度会計監査

(アートホテル新潟)

第一回本部会

【評議会に向けての議案

審議、決定】

※書面による審議

評議会

【令和二年度会務報告・

決算報告】

【令和三年度活動の重点

・ 専門部活動計画・役員

及び予算案承認】

※書面表決による審議

教育新報「第181号」発行

カミングホームデイ

(中止)

第47回同窓生の集い

(中止)

全学同窓会交流会

(講演会オンライン)

令和四年

教育学部教員・職員と同窓

会との懇談会・懇親会

(中止)

教育新報「第182号」発行

第二回本部会(実施予定)

卒業式・祝賀会

- 4・5
4・15
5・8
6・5
7・20
8・28
9・18
10・17
1・21
2・20
3・5
3・23

学校紹介
②

地域とともに未来にはばたく子どもを育む

佐渡市立新穂中学校

佐渡市立新穂中学校は、佐渡市の中央部に位置し、創立七十六年目を迎えます。日常的に野生のトキを見ることができ自然豊かな環境の中で、全校生徒八十名が活動しています。

小規模校ではありますが、生徒一人一人を全職員で温かく見守りながら日々の教育活動を行っています。そして、地域に根ざした教育活動を積極的に取り入れ、生徒一人一人が輝き、未来に向かってはばたくことを目指しています。

一 地域を理解し、誇りを受け継ぐ

佐渡、そして新穂地区には他に誇れる自然や文化が豊富にあります。生徒がそれらを知り、後世に受け継いでいくための教育活動を、総合的な学習の時間を中心に行っています。佐渡金山ジオパーク、宿根木といった観光名所の探訪や、佐渡おけさ、佐渡太鼓の体験、伝統的織物の裂織作成など、三年間で多くの地元の誇りを学びます。

また、「あいさつの良い地域 新穂」を受け継ぐため、普段の学校生活における指導や、専門委員会からの呼びかけ、全学級で「あいさつ」を題材にした道徳の授業を行っています。さらに、

中学校区三校の学校運営協議会を中心に、地域住民にも呼びかけ、新穂地区全体で「あいさつ祭り」も行っています。



二 地域とともに未来へ繋ぐ

当校では、昨年度から総合的な学習の時間でSDGsについて学習しています。地球規模で考えなければいけない課題について、全校生徒が縦割り班を組んで調査をし、自分たちができる改善策を地域の中で取り組んでいます。

学習を進めるに当たり、まずは、生徒が情報収集しやすい環境を整備をしました。昨年度からNIEの活動に参画したことにより、毎日三社の新聞を自由に閲覧でき、多様な情報をリアルタイムで得ることが出来ます。加えて、

新聞から得た情報に関して私見を述べる取組を、短学活に行い、発信力を育成しています。

また、学んだことを活かし、自分たちが地域でできる活動を、企画・運営しています。募金活動や清掃活動、プレゼンテーション動画を作成し、地域に向けて自然保護や観光業の活性化などを呼びかけているグループもあります。地域の方から多くの協力を得ながら、生徒の情報収集能力、分析力、企画・運営能力などが確実に育ってきています。

さらに、当校では立志元服式が行われています。地元出身で幅広く活躍されている方からご講演をいただくとともに、三年生が、多くの方の前で今後の決意を表明します。長年続いている取組で、地域全体で生徒を温かく見守り、育てていく風土が広がっています。



新穂中学校は、地域に支えられ、地域とともに生徒を育てています。今後も、生徒たちの多様な可能性を育成する取組を行っていきます。

(文責 教頭 荻野 伸也)

事務局だより

会員の皆様への
御礼とお願ひ

今年度もコロナウイルス禍のため十分な活動ができませんでしたが、大勢の会員の皆様に支えられ一年が終わろうとしております。今年度の会員数は、

- ① 永年会員 (H22/R3) 3344人
- ② 学校・機関等会員 2128人
- ③ 個人会員 161人
- 合計 5633人 です。

同窓会に対して温かいご理解とご協力を賜りありがとうございます。心から御礼申し上げます。さて、最近になりようやくコロナウイルス収束の兆しが見え始め、大学のキャンパスも元氣を取り戻しつつあります。そこで、今後の充実した活動に向けていくつかお願い申し上げます。よろしくお願ひします。

- ① 同窓会ファイルを作成するなど確実な引継ぎをお願いします。
- ② 同窓会のホームページやメールの一層の活用をお願いします。
- ③ 教育新報等が確実にお届けできるように住所等が変わりましたらお知らせください。

学校紹介 ③

「新しい時代に子どもの学びをつなぐ、 幼児教育の在り方」

新潟市立西幼稚園

新潟市西区にある新潟市立西幼稚園は、昭和五十一年に地域住民の強い願いによって開園しました。今年で創立四十六年になります。

近年、子育て世代が求める幼児教育が多様化していることや、子育て支援制度が実施されたことなどで、園児が減少しています。このような厳しい状況ですが、園では子どもの主体性を大切にし、しなやかにたくましく生きる力を育む、質の高い幼児教育を目指し、教育活動を進めています。

一 地域ととも育て育む

幼児期の教育は、子どもが主体的に様々な対象と直接的にかかわり、総合的に学んでいく営みです。本園では、生活の中で、子どもが自ら心を動かし、豊かな経験から学ぶ教育活動に取り組んでいます。

6月中旬、子どもたちは、手作りの釣り竿を持って地域の田んぼにザリガニを探しに出掛けました。地域の人は、田んぼの水かさが減るこの時期になると、ザリガニがいることを園に教えてくれます。この知らせを聞いた先生たちは、どうしたら子どもが興味や関心をもつだろうか、どのようにザリガニ



に出合わせようかと、計画を立てます。この意図的な働き掛けによって、子どもの主体的な遊びの充実、そして学びにつながります。ワクワクする気持ちが高まった子どもたちは、それぞれ目的をもち、地域に出掛けて行きました。身近な自然に触れ、園に戻った子どもたちは、友達と一緒にザリガニを観察し、凶鑑で調べたり、動きを真似たりして、思い思いに遊び出しました。このような経験を積み重ねることによって、思考力や表現力、創造力などの資質・能力が育まれ、さらに地域へ親しみを感じる子どもに育つことを願っています。

二 子どもの学びをつなぐために

園では、幼児教育から学校教育へ学び（経験）がつながることを目的に、校種間連携に取り組んでいます。連携

の中で、小学校の先生から、入学してくる子どもの実態は様々で、経験に差があり苦労していると聞きます。実際、就学前の幼児を教育する施設は多様で、保育内容にも違いがあるため、入学時の子どもの経験に差があるのが現状です。しかし、子どもが幼児期に得た豊かな学びをつなぎ、次に生かしていくためにはやはり幼稚園・保育園・こども園が連携し、目指す子どもの姿を共有していくことが必要です。

そこで今年度は、質の高い幼児期の教育の在り方を共に考えるために、他の園や保育園、認定こども園の先生と保育を見合う「保育を語る会」を行いました。

参観後のフリートークでは保育環境や子どもの姿などから保育の在り方等について、和気あいあいとした雰囲気情報交換をすることができました。

このような取組を継続し、多方面から子どもの学びをつないでいきたいと考えています。

今後、市立幼稚園は再編計画が進み、半数の園が順次閉園になります。

西幼稚園は存続する園として、新しい時代に求められる資質・能力を子どもたちに育んでいきます。



（文責 園長 大矢 晃子）

編集後記

今年度も、二年続けての新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、同窓会開催行事の大半が中止となつてしまいました。そのため今年度も、教育新報を通して、新潟大学教育学部同窓会員の皆様に、カミングホームデイや同窓生の集い等の様子をお伝えすることができなかつたこと、とても残念に思っております。

しかしながら、本部役員、並びに、会員の皆様から、たくさんのお声を快くご寄稿いただいたおかげで、教育新報一八一号、一八二号ともに素晴らしい内容でお届けすることができました。多くの皆様に感謝申し上げます。

学校現場では、マスク・換気・手洗い等が続けながら、徐々にではあります。従来教育活動に近づいてきているように感じます。学習参観、運動会、修学旅行、縦割り班活動等も創意工夫を凝らしながら行うことが出来るようになってきました。ぜひとも次年度は、学校現場同様に、教育学部同窓会開催行事も、リモートではなく対面で行えるようになることを願っています。また、久しく行っていない懇親会等の正常開催も期待したいものです。

（文責 広報部長）

研修部特別企画

先輩を訪ねて

齋川 英子 さん
(第二十一期卒業生)

研修部長 小林 由希恵

前号(第一八一号)に引き続き、齋川英子さんからお話を伺いました。

その二

長岡分校時代、和光寮での思い出

齋川さん

「大学闘争まっただ中、学間に憧れて、特に厳しいと言われる金子ゼミの門を叩いたのですが、金子先生は優しく見守ってくださいました。金子先生は長岡分校から通っていたらしくて、私も長岡分校だったのです。」

事務局杉山さん

「先生も長岡でしたか。私も同じです！」

齋川さん

「それでは、きつつき？」

小林

「きつつきって何ですか？」

事務局杉山さん

「工学部は寮があるけれど、教育学部の男子は寮がないので、近くで下宿して、朝晩、女子寮に食事をついばみに行っていたのです。月四〇〇〇円くらいだったかな。」

齋川さん

「和光寮(女子寮)は、寮の運営を

自分たちで行う自治寮だったので、寮費の他に、それも収入源としていたのですね。寮には食事作りを兼ねた管理員さんがいて、学生も当番で盛り付けなどの手伝いもしていました。行事があるときには、おにぎり作りも。」

小林

「そこに食事に来ていた方々が「きつつき」さんですか？新報に掲載しても大丈夫な内容ですか？」

事務局杉山さん

「もちろんです。懐かしいなあ。朝晩二食と雨露をしのげる宿があれば生きていられた。」

齋川さん

「和光寮には一、二年生の女子と家庭科専攻の三、四年生のお姉さんたちがいました。寮長さんを中心に規律のある寮でした。夜十時の門限、一斉の掃除など、きちんとしていました。」

事務局杉山さん

「年に何回か食堂でダンスパーティーがありました。食堂のテーブルや椅子を片付けて。一年生のときに、お姉さんたちからダンスを教えられてもらって、楽しかった。」



齋川さん

「きつつきさんも一緒にみんなで八万台にハイキングにも行きました。おにぎりを作って夜に出発、八方台で日の出を見て朝方帰ってくるなんて、今では考えられないでしょ。栖吉川の土手沿いをずっと歩いて。栖吉川をカヌーが下っていたり、ウシガエルが鳴いていたり。これが大学かと思うくらい、アットホームでした。二年間だけでしたが、楽しい思い出でした。」

その三

管理職を志すことになった出来事

小林

「算数の教材研究や授業づくりに先進的に取り組まれていらして、私にとつて憧れの齋川さんが教頭先生になられたときにはとても驚いたのですが、何かきっかけがあったのですか？」

齋川さん

「平成の初めのころ、新潟市の学校における男女平等教育推進委員に任命されました。その会議の中で、「学校はそもそも平等です。男の子、女の子と区別せずに平等に教育していきます。」と発言したところ、市民代表の委員や助言者の齋藤勉先生から

「学校の中にいる者は気づいていない。学校に戻って児童名簿や教職員名簿を見てください。」と諭すように言われました。改めて名簿を見て、当たり前だと思っていた男女別名簿が、平等ではなかったことに気づかされました。私にとっては今までに

ない視点であり、ショックでした。それから、委員の方々と一緒に副読本やカリキュラムづくりが始まりました。進めていく中で、「学校は一番遅れていたのだ」と気づきました。当たり前だと思つて見ていた学校は、実は男性優位であり、校内の役割分担にも性差がありました。校長、教頭など、子どもの目の前に立つのは全て男性であることもその一つです。子どもの目に映る社会を男女平等の姿に変えたいと強く思うようになり、それが管理職の道を選んだきっかけです。」



現在学習ボランティアとして学校支援をされていることは、これまで先輩から受けてきたご恩を次の世代へ送っているのだと笑顔で語られる齋川さん。最近、ハーブインストラクターの資格を取得され、ハーブを通して、子どもたちや地域の方々ともつながっていること、そこでの新たな出会いや学びがたくさんあることもお聞かせいただきました。教職を去られた後もなお、若々しく豊かに生きる姿は私たちの憧れであることに変わりありません。

さて、令和の時代、子どもたちの目に学校はどのように映っているのでしょうか。差別や偏見のない社会、学校をつくっていききたいという気持ちを新たにしました。貴重なお話をいただき、ありがとうございます。